

フィールドワーク・セッション

そこ〔で・に〕生きるための、知のありか。



管啓次郎 #3

アラスカ, ジュノー郊外 (2014) 撮影: 管啓次郎

2015/12/19/Sat
at Matsuda Lab.

「フィールドワーク」とは、何だろう。

このレクチャー・シリーズでは、諸分野の前線から広義の“フィールドワーカー”をお迎えし、これまでの活動や足跡について語ってもらおうと共に、その「フィールド」の見だし方や読み解き方、そしてそのフィールドを通じて捉えられる《世界》についてディスカッションを行う。

Lecture 管啓次郎

14:00
15:30

REWILDING

Session 管啓次郎 高山明 松田法子

15:45
16:45

湿地・荒地・砂漠 〈再野生化〉の思想



管啓次郎 (すが・けいじろう)

1958年生まれ。詩人・比較文学者。明治大学大学院理工学研究科 教授。

1980～90年代にかけて、アメリカ中西部、南米、カリブ海地域、ハワイなどで暮らす。

多言語性・亡命・移住などをテーマとする比較文学論のほか、詩作、批評、翻訳、朗読など多領域で活動。2011年読売文学賞受賞。著書多数。

フィールドワークセッション

そこ [で・に] 生きるための、知のありか。



上段 オランダ、オーストヴァールダース (2015) 下段 南相馬 (2013) 撮影: 管啓次郎

2015/12/19/Sat at Matsuda Lab. 14:00 - 17:00

砂漠に住むというのがどうということなのか、砂漠に住んでみるまで知らなかった。そして知ったのは砂漠の美しさだった。サン＝テグジュペリの『星の王子さま』のおしまいのほうで、王子が「砂漠ってきれいだな」とつぶやく。それに対して、王子とつかのまの友情でむすばれた「ぼく」は、こんなふうを考える。「ほんとうだった。ぼくはいつだって砂漠が大好きだった。砂の丘の上にすわってみる。何も見えない。何も聞こえない。それなのに何か、無音の中で光を放っている……」〔…〕

ぼくが住んだ砂漠は北アメリカ大陸西部のソノラ砂漠で、それはサン＝テグジュペリが知っていたサハラ砂漠とはちがった。サハラのような砂の海ではなく、岩とサボテンの荒野なのだ。岩と、数種類のサボテンと、さまざまな灌木の荒野だ。そして砂漠に住むいろんな動物たち。ぼくはそこに三年住み、その土地を愛し、その土地に救われた。

『川が川に戻る最初の日』(『ろうそくの炎がささやく言葉』勁草書房, 2011年)

そして異なった生き方があるところ、異なった言葉があり、異なった考え方があるところ。それでもあらゆる「土地の伝統」に共通するのは、元来流浪する存在であった自分たちが、ある決定的な選択によってこの土地に住むようになり、この土地を心から愛し、土地に感謝し、これからもいつまでもここに住んでゆこうと思っている、という決意だ。〔…〕

口伝の教えや祈り、歌や生活の細部にいたる掟によって、人々が世代ごとに(あるいはひとりの生涯の中でもその大きな節目ごとに)「この土地で生きてゆくのだ」という決意を確認しつつきてきたことは、まちがいない。空をかけてゆく太陽の運行に合わせて、毎年周期の中で祝われる部族の儀礼は、どれもこの根源的な決意の確認であり、確認の上演＝再現にほかならなかった。

『野生哲学 アメリカ・インディアンに学ぶ』(講談社現代新書, 2011年)

管啓次郎 ◇略歴

- 1958 生まれ
- 1983 東京大学 教養学部教養学科フランス科 卒業
- 1984 南米各地・カリブ海域に滞在
- 1987 ハワイ大学 人類学大学院 留学
- 1990 ニューメキシコ大学にて修士号取得
- 1997 ワシントン大学にて博士論文提出資格取得
- 2005 明治大学理工学部 教授・オークランド大学 客員教授
- 2008- 明治大学大学院理工学研究科 教授

主著に、『コロンスの犬』(1989)、『狼が連れだって走る月』(1994)、『トロピカル・ゴシップ 混血地帯の旅と思考』(1998)、『ホノルル、ブラジル 熱帯作文集』(2006)、『島の水、島の火』(2011)、『斜線の旅』(2011, 読売文学賞受賞)、『ストレンジグラフィ』(2013) など。

詩の主題はつねに地、水、火、風。自然力は人が書くどんな詩にも流れこむ。そこを流れる時間は悠久で、百年も千年もない。一方、人工物は、技術は、人が意図しないかぎりには詩に影すら落とさない。意識されない技術は疑似自然となって、われわれが暮らす都市に輪郭と限界を与えながら、みずからの存在を忘れさせる。この忘却を、自然が打ち砕く。人間が社会と称するものがどんな循環にさらされているかを思い出させる。そしてわれわれは、自然力との関係をむすびなおすにも、技術の暴走を止めるにも、言葉によってわれわれの行動を調整する以外にない。詩は、詩こそが、生きるための技術なのだ。

(『ろうそくの炎がささやく言葉』勁草書房, 2011年より)

管啓次郎